



1-1 漁場利用の比較研究

● 共同研究の活動概要

研究代表者 田和 正孝

はじめに—研究班の立ち上げ

海域は豊かな資源を有するとともに、「ヒト・モノ・情報」が行き来する空間として、現在に至るまで人類文化のなかで大きな意義を有してきた。とくに水産資源に注目すると、人間はそれらを獲得する空間すなわち漁場の利用に関して、膨大な技術や知識を蓄積してきた。他方において、資源の獲得をめぐる個人レベルから国際的なレベルにいたるまで、さまざまな対立や紛争の構図を生み出してきた。このような漁場利用や資源管理に関わる諸問題を解明するためには、水産・漁業経済学からの議論にとどまらず、人類学、民俗学、社会学、地理学など社会・文化的な様々な研究分野からの議論が必要である。「漁場利用の比較研究」班は、以上のような状況を踏まえ、①漁場利用の技術や知識の実態と歴史的推移を明らかにするとともに、地域間・国家間・生態環境間といった多様な比較を通して、漁場利用の社会経済的・歴史民俗的意義について問うこと、さらには、②現代社会における漁場利用の研究には学際的かつ国際的な視野が不可欠となっていることから、そうした現代的課題の解決に有効な社会知・民俗知を見いだすこと、の2点を主たる研究目的とした。

本共同研究を始めるにあたって、安室知より田和に研究代表者として参加するよう依頼があった。安室と田和は、すでに2008年9月に開催された人文地理学会第112回歴史地理研究部会で研究交流をしたことがあった。安室は、カモ猟をめぐる環境利用や文化資源化、ワイズ・ユースの問題（安室2009）、田和は伝統漁具を通じてみた沿岸漁場利用（田和2009）を取り上げ議論するとともに、研究上の問題点を共有した。本研究部会における民俗学的視点と文化地理学的視点からの情報交換が、「漁場利用の比較研究」班を結成するきっかけを生み出したともいえる。

ところで、田和は漁業文化地理学的な視点から斯学の研究を回顧した結果、漁場利用に関する研究を大きく2つに分類してとらえてきた。ひとつは、制度（しきたり）や用益権に注目した漁場利用研究、もうひとつは漁業活動の生態学的側面に注目した漁場利用研究である。前者の中心は、漁場争論や漁業権益の変化を史・資料を用いて考察するものと位置づけることができる。後者の中心は、計量的手法や参与観察法によって得られた漁業活動にかかわる諸資料を通じて漁業者と漁場との関わり、すなわち人間—環境関係（man and environment relationship）を理解する研究である。

田和は、これまで、複数の地域において後者にあたる漁場利用の生態学的研究を進めてきた。それらは漁場空間で行動する漁業者に焦点をあてた共時的な研究ということもできた。その後、自身が同じ調査地に時を違えて訪ねる機会を獲得するにおよんで、変化する漁場利用形態にも注目するようになった。これは、フィールド調査に基づく新たな時間軸を設定して、通時的に漁場利用を把握しようとする方法であり、上述した漁場利用研究の2分野を融合する立場といえる。共同研究では、多くの専門分野でなされてきた漁場利用に関する諸研究がいかなる時間と空間設定の中で分析されてきたかを考察することも共通の研究課題とした。

1. 班員の構成と研究テーマ

以上のような視点に基づき、安室とともに班員の構成メンバーについて考えた。この時考慮したのは、漁場利用の時間的・空間的研究を十分に認識しており、内容の濃い議論を展開できる研究者の集合体をつくることであった。その結果、民俗学の安室、漁業文化地理学の田和、水産社会学から若林良和、歴史地理学を専門とする河原典史、橋村修が加わった。

安室は複合生業論の提唱者として、また水田漁撈研究に関して学界で名の通った民俗学者であり、漁場利用についても日本列島沿岸とくに三浦半島や長門の磯根地帯において、民俗知識と民俗技術を解明すべく調査を続けている。農民漁民的な漁場利用や農間漁業などにも造詣が深く、漁場を認知する簡易三角測量技術やマアテによる景観の道具化（海中・海底という不可視空間の可視化）についても研究を進めてきた。若林は、カツオ釣り漁船の労働に関する研究者として知られる。カツオにまつわる民俗、食文化研究なども視野に入れた総合の学としてのカツオ学の提唱者でもあり、これまで多くの研究書をものしてきた。近年は太平洋・東シナ海地域においてカツオの集魚装置漁業とその漁場利用について研究を続けている。河原は、沿岸漁村の家屋配置、漁業補助空間の研究をはじめ、移動漁民の研究、第二次世界大戦前における日本人の漁業移民と彼／彼女らの漁業開拓などに精通している。近年の主たるテーマであるカナダにおける日本人移民の漁業活動については、新たな史・資料を見出し、それらを用いる研究手法の有効性にまで議論を高めてきた。橋村は、九州各地の海と人との関わりに関する歴史を中世から近世にいたる文書資料に基づいて探ってきた。近世期における漁場利用慣行の全国的な動向にも注目している。現代のシイラ漁にも関心を抱き、シイラを漁獲するための集魚装置漁業についてアジア、中央アメリカ、地中海などをフィールドとして比較研究をおこなっている。田和は、西南太平洋諸地域における沿岸漁業の漁場利用について現地調査を続け、近年は伝統漁具である石干見の文化誌的研究を進めている。

班員が掲げた研究テーマは以下のとおりであった。

安室 知：海底微地形の命名、民俗的認識に関する民俗学的研究

若林良和：パヤオ（浮魚礁）の漁場利用をめぐる社会経済的、民俗学的研究

河原典史：海外日本人漁業者の漁場利用および漁業史的研究

橋村 修：漁場利用を示す地図類の分類・活用に関する歴史地理学的研究

少獲性魚種を対象とする漁業における漁場利用の地域的特性と歴史的特性に関する研究

田和正孝：伝統的漁法石干見の漁場利用とその現代的意味に関する研究

東南アジアにおける小規模漁業の漁場利用に関する生態地理学的研究

漁具図解・図譜などを用いた地域漁業誌の構築に関する研究

2. 2009～2011 年度の共同調査・研究

研究班が組織された 2009 年度から 2011 年度までの 3 年間にわたる調査ならびに研究内容については、『神奈川大学 国際常民文化研究機構 年報』1～3 に班員各自が報告しているので、そちらを参照されたい。以下では共同で実施した現地調査ならびに研究会活動に限って報告する。

(1) 2009 年度

2009 年度は本プロジェクトの予算化を待って具体的な研究活動を開始せざるを得なかった。そのため、全員による調査・研究活動は年度末の 2010 年 3 月となった。神奈川大学にて本班の「調査研究のねらい」を討議、確認するとともに、各自の調査計画について情報を共有した。また、安

室の案内で横須賀市自然・人文博物館を訪れ、収蔵品を見学した。水産総合研究センター中央水産研究所にも足を運び、同図書館が所蔵する水産関係資料（漁業権資料、水産博覧会、内国勸業博覧会関係報告書など）の閲覧と写真撮影をおこなった。これらの基礎調査は2年目の本調査へと引き継がれた。

2010年3月27、28日には神奈川大学において国際シンポジウム「海民・海域史からみた人類文化」が開催された。第Ⅱ部「海民社会と漁業—東アジア世界から—：海民・海域史への展望」において、田和が「伝統漁法石干見の保存と活用」（田和2010）と題して話題を提供したことも、本班の成果のひとつとなった。

（2）2010年度

各自の研究テーマに沿う個別の調査と並行して、研究会を2010年7月4日に神奈川大学にて実施した。本研究会では、「漬柴漁業」を共通テーマとして設定し、若林「パヤオ（FAD）をめぐる漁場利用—現代的アプローチによる沖縄県を中心とした中間事例報告—」と橋村「日本列島周辺における漬木（＝パヤオ）漁業の漁場利用史」の2本が報告された。若林は、先行研究を渉猟しながらパヤオ研究を位置づけ、これを利用する地域の比較研究が必要であることを指摘した。さらに沖縄県宮古島沖および高知県沖におけるパヤオ漁業に関して漁業技術、資源管理、漁場紛争などに注目しながら詳細な報告をおこなった。橋村は、日本における漬木漁の史的展開および明治末期以降に各県水産試験場がおこなったシイラ漬漁業実験について報告した。これらによって漬木漁の地域性の把握（空間的視点）と近代漁業における位置づけ（時間的視点）が明らかとなった。

以上の2報告を受けて、現代の漁場利用と紛争、地域活性化事業、研究方法における共時性と通時性の問題などについて議論した。くわえて、12月に沖縄県宮古列島において現地研究集会をもち、パヤオ漁業の漁場利用を共同で調査することが決定された。

2010年12月24～26日には、予定通り宮古列島にて全員が参加して現地調査を実施した。調査テーマは「パヤオ（浮魚礁）と石干見の漁場利用」とした。伊良部漁業協同組合での聞き取り調査では、1980年代前半からのパヤオ漁場の成立と展開過程、漁場への出漁形態と漁法などについて多くの情報を得ることができた。漁協が保管するパヤオ関連の書類を閲覧することもできた。また、伊良部島の佐和田に現存する石干見（カツ）の所有者を訪ね、出漁日数や漁獲物（たとえば初夏のアイゴ〈スク〉漁について）など、漁に関する貴重な話を聞き取ることができた。伊良部島では尖閣諸島出漁と領海問題、池間島では南洋へのカツオ出漁という歴史的問題についても付加的に調査した。

（3）2011年度

研究集会としては、2011年9月25日に東京海洋大学海洋工学部越中島会館にて、初めての試みとして、「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」班（研究代表者は伊藤康宏氏、以下、伊藤班と略記）との連携研究会を実施した。当日は、伊藤班から、中野泰氏の報告「占領期のフィールドワーク—民間情報教育局（CIE）における fishery system & attitude survey を中心に一」、本班から安室「磯漁における海岸微地形の分類と命名—漁場利用の民俗技術誌—」、河原「第二次世界大戦以前のカナダ西岸におけるサケ缶詰産業と日本人—“Fire Insurance Plan”と“Debits”からの検討—」の2報告がなされた。

安室報告では、自身が20年以上にわたって続けている横須賀市佐島におけるフィールドワークの成果をもとに、いわゆる「海付きの村の生業空間」として、特にヤマ（ヤマアテ）という漁場認

知の技術をめぐる報告がなされた。三次元的な漁場空間の認知が技術論的、身体論的、さらには行動論的な分析に終わることなく展開するのは、村の生活を十分に調査し、熟知してきた安室の「分厚い民俗誌的記述」がベースにあるからである。討論では、そのことに対する高い評価が得られた。他方、民俗誌的プレゼンス（記述される時期）に関わる問題点が指摘された。

河原報告では、火災保険地図の利用方法が明示され、また従業員帳簿や移住者が残した日記がカナダ移民史、技術史の解明において有効であることが示された。水産史を専門とする伊藤班のメンバーからこれらをめぐって活発な質問と議論があり、関係する文献類の紹介もなされた。塩漬けニシンの輸出先に関するデータについて、東アジアにおける戦前の水産物流通史に詳しい伊藤班の中居裕氏から当時の状況について補足的に説明があり、加えてコメントと質問がなされたことは、連携研究会にふさわしい成果であった。

2012年2月18、19日には年度最終の報告会をかねて、兵庫県西宮市の大学交流センターにて研究会を催した。報告内容は以下のとおりであった。

安室 知「自然利用と生業戦略—魚の成長段階名をめぐる—」

若林良和「パヤオは「漁師の貯金箱」!? —地域資源としてみたパヤオの意義：沖縄県宮古島地域の事例—」

橋村 修「マルタにおける集魚装置漁業—Maltese FADs Fishery—」

「有明海をめぐる漁場紛争に関わる史料と絵図—明治20年代の長崎県と熊本県—」

河原典史「20世紀初頭のカナダ西岸における日本人漁業者の漁場利用—日記と視察報告書からのアプローチ—」

田和正孝「台湾北西海岸、苗栗縣外埔の石滬漁業」

「第二回水産博覧会と兵庫県漁具図解」（資料配布のみ）

安室は、渋沢敬三の『日本魚名の研究』（1959）を拠り所にしながら、自然を利用する意味を魚類の分類および命名の体系から探った。山口県にて実施した調査成果を提示して、商業経済の浸透や技術革新といった時空間的変容の中で命名体系と成長段階名が変化することを解明した。若林は、本プロジェクトで継続してきたパヤオの利用に関する調査研究で明らかとなった諸点を整理した。沖縄県宮古島で蓄積してきた成果に基づいて、パヤオが地域の特徴的な漁具・漁法としてとどまるだけでなく、地域活性化の新たなコンテンツとしても位置づけられることを示した。橋村は、マルタにおける2度の調査（2010・2011年）に基づいて、シイラの浮魚礁（FADs: Fish Aggregating Devices）漁業について報告した。これまで国内外において進めてきたシイラ漁に関する一連の研究につながるとともに、若林の研究とのコラボレーションも視野に入れた。装置の敷設や漁期の到来時の儀礼、シイラをめぐる文化など様々な情報が提供された。歴史地理学的視点に立つ有明海の漁業権研究は、著書『漁場利用の社会史』（2009）の研究視点をふまえた発展的な研究報告である。河原の報告は、カナダの日本人漁業についての旺盛な資料収集に基づいている。オーラルデータがますます得にくくなる現状に鑑みながら、現地調査を通じて資料を再検討し、研究方法論（たとえば火災保険地図の活用）を精緻化し、看過されてきた資料類（体験者の日記や技術専門員による報告書など）を発掘するなど、研究の体系化が進められていることを報告から十分に理解できた。田和は、台湾の石滬（石干見）漁の主要な3地域を紹介し、大正期の漁業権資料を利用して3地域の所有形態を比較検討する視点を報告した。

全員が以上の諸報告の内容を成果報告書に盛り込むことを確認した。

本研究会では野外調査も計画し、兵庫県瀬戸内海漁業をリードする明石浦漁業協同組合において

聞き取り調査を実施した。計画戎本裕明組合長（代表理事）と村上貴生参事から提供資料に基づいて同組合地区の漁業概要について説明を得たのち、意見を交換した。買い取り販売事業の展開とサワラ・ハマチの命名（安室）、市民目線で見える「ぎょしょく」普及活動（若林）、潜水漁業と出稼ぎ従事者（河原）、魚の旬の変化（橋村）などについて新たな知見を得た。

3. 成果報告書『漁場利用の比較研究』の刊行

2013年3月に成果報告書『漁場利用の比較研究』（国際常民文化研究叢書1）を刊行し、当初より予定していた3年間の研究会活動および野外調査、これらを踏まえた4年目の論文執筆活動を加えたプロジェクト型共同研究全体を無事に終えた。

本研究の主要な目的は、上述したように、漁場利用の技術や知識について、その実態と歴史的推移を明らかにするとともに、地域間あるいは異なる生態環境での漁場利用について考察し、漁場利用の社会経済的、歴史民俗的意義について問うことであった。我々の漁場利用に関する研究が、図1のモデルにみられるように、様々な空間と時間設定の中において考察されてきたことを改めて認識できた。

成果報告書は、各班員および研究協力者が実施した調査研究で得た知識はもとより、共同調査に際してフィールドで交わした議論、研究会、シンポジウムで得た知見などを加えてまとめたものである。また、報告書には各自2篇以上の執筆を課し、本共同研究で獲得した成果を可能な限り問うこととした。詳細は報告書に譲るが、班員数は決して多いとはいえなかったものの、充実した議論を展開することができたし、全員が研究成果を十分に示せたものと自負している。しかしながら、当初より提示していた「現代社会における漁場利用を研究するための学際的かつ国際的な視野」を十分に高めるには至らなかったことは反省点としてここに記しておかなければならない。

最終年度は論文執筆を中心に進めてきたことから、メール等による会議と連絡、情報交換が主となり、一堂に会する機会をなかなか設けるには至らなかった。そこで、2013年3月30日に成果報告書の刊行にあわせて研究会を催した。各自が報告書に盛り込んだ内容について解説するとともに、今後の研究課題を確認した。あわせて最終年度に開催を予定している公開研究会の実施方法についても検討した。

安室は、百姓漁師の漁場認識に関する論文の中で、ヤマアテの技法と空間認識、イソネをはじめとする海底地形の認識について明らかにした。研究会ではモグリやミヅキといった磯漁の漁場利用

と空間認識についても討論した。若林は、集魚装置漁業に関する2篇の論文をものした。実地調査において得た未発表資料が残されているので、それらを今後とも論文に仕上げ発表してゆく計画である。橋村は集魚装置漁業に関する論文を2篇と中米コスタリカのシイラ漁業についての報告1篇を執筆した。今回の調査を踏まえ、集魚装置漁業（バヤオ）とシイラ漁業に関する1書を編む構想をもっている。河原は、カナダにおける日本人移民漁業者の漁場利用について社会史的な側面も視野に入れて2篇の論文を執筆

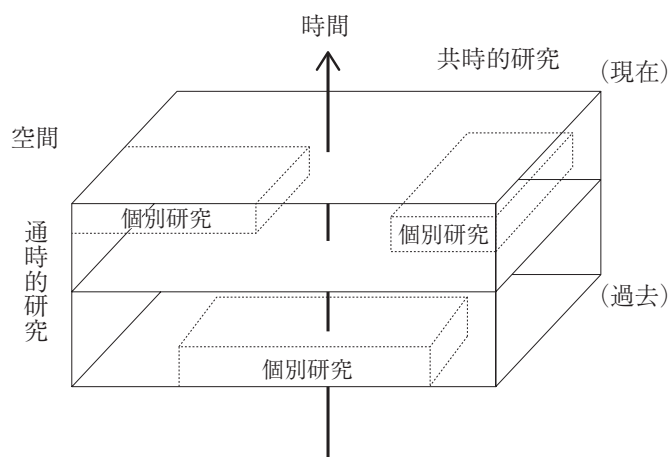


図1 漁場利用の比較研究の枠組み
（図中の破線部分は様々な個別研究の広がり示す）

した。これらは自身がこれまでものしてきた「日本人のカナダ移民に関する歴史地理学的研究」の一部を構成する。今回の調査を通じてカナダ移民漁業に関する情報提供者が鹿児島県枕崎に在住することが明らかになったので、今後、本格的な調査に着手するという。また、一連の研究で精緻化された種々の調査方法、分析方法に関する論文の執筆も予定している。研究協力者の越智信也が、宝暦期の陸奥国における2村の境相論を紹介するとともに、今後さらに文書資料を分析しうる大きな可能性を秘めた論文を寄稿したことも特筆すべき成果であった。田和は、台湾における近代期の石干見漁業の漁場利用と所有形態および『兵庫県漁具図解』に関する論文を執筆した。研究会では、石干見研究を地域に還元する可能性についても討論した。

4. 公開研究会の開催

公開研究会の開催は、成果報告書の刊行とともに各班に課された重要なイベントであった。前述したように2011年9月25日に共同で研究集会を実施した「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」班（伊藤班）とは、その後も研究者の交流、学問的背景の共有があったことから、これらの経験を下地として、2014年2月15日に伊藤班とともに「魚と人の関係史—『漁場利用』班と『水産史』班の合同成果発表会—」と題して、神奈川大学にて公開研究会を開催した。「漁場利用の比較研究」班からは橋村、安室、河原の3名が話題を提供した。

橋村「回游魚シイラと人との関係史—「雑魚」「地魚」「ハレの魚」としての回游魚をめぐる歴史民俗—」においては、重要な分析軸として「歴史軸」と「地域軸」が提示された。安室「再考、魚名の研究—アワビの民俗分類と命名—」においても、一地域を取り上げる視点の重要性が説明され、渋沢敬三を引用して「時と所と人」という分析軸が披瀝された。河原「20世紀初頭のカナダ西岸における日本人漁業移民—サケを獲るひと・運ぶひと—」ではモノグラフィック・プレゼンスの明快さ、さらには漁場利用にまつわる史・資料の発見と利用可能性が提示された。これらのことは、前掲図1の内容を補強する考え方である。漁場利用研究における時間的・空間的視点については常に議論されなければならないし、今後も検討していかなければならない。

おわりに

成果報告書の刊行から1年を過ぎて、「漁場利用の比較研究」班は共同研究の成果をふまえて、更なる進化を遂げている。それらは、2013年度の研究業績にも反映されている（河原編2013、河原2014、田和2013、田和編2014、橋村2013、Hashimura 2013、安室2013、2014）。

国際常民文化研究機構でプロジェクト型共同研究の機会を与えられたことは、我々班員にとっては貴重な経験であった。すべてのスケジュールを予定通りになし得たことは、国際常民文化研究機構の研究者の先生方、事務をご担当くださった方々のお蔭である。皆様に心よりお礼を申し上げて「おわりに」にかえたい。

参考文献

- 神奈川大学国際常民文化研究機構編（2010）『神奈川大学 国際常民文化研究機構 年報1』、同機構、255p。
 神奈川大学国際常民文化研究機構編（2011）『神奈川大学 国際常民文化研究機構 年報2』、同機構、331p。
 神奈川大学国際常民文化研究機構編（2012）『神奈川大学 国際常民文化研究機構 年報3』、同機構、335p。
 河原典史編（2013）『カナダ日本人漁業移民の見た風景—前川家「古写真」コレクション』、三人社、197p。
 河原典史（2014）「カナダへ雄飛した臼杵のひと—小坂家の移住史—」、臼杵史談 104、pp.59-77。
 渋沢敬三（1959）『日本魚名の研究』、角川書店、364p。
 田和正孝（2009）「近代期の東アジアにおける石干見漁—台湾・日本の漁業権資料をふまえて—」、人文地理 61-1、

pp.87-88.

田和正孝（2010）「伝統漁法石干見の保存と活用—新たな研究へ向けて—」、国際常民文化機構編『国際シンポジウム報告書Ⅰ 海民・海域史からみた人類文化』、国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所、pp.157-165.

田和正孝（2013）「石干見研究を還元すること」、*E-journal GEO* 8-1、pp.59-65.

田和正孝編（2014）『石干見に集う—伝統漁法を守る人びと』、関西学院大学出版会、98p.

橋村 修（2009）『漁場利用の社会史—近世西南九州における水産資源の捕採とテリトリー—』、人文書院、272p.

橋村 修（2013）「回游魚利用をめぐる文化地理」、林紀代美編『漁業、魚、海をとおして見つめる地域』、冬弓舎、pp.166-179.

Hashimura, O. (2013) The history and culture of dolphinfish (*Coryphaena hippurus*): Exploitation in Japan, East Asia, and the Pacific. In O. Rintaro, A. Morrison and O. Addison (eds) *Prehistoric marine resource use in the Indo-Pacific regions*. ANU Press, pp.141-151.

安室 知（2009）「伝承カモ猟の文化資源化とワイズ・ユース」、人文地理 61-1、pp.86-87.

安室 知（2013）「日本における海人研究とその問題点」、比較民俗学会（韓国）50（別冊本）、pp.105-122.

安室 知（2014）「再考、魚名の研究—アワビの民俗分類と商業論理—」、国立歴史民俗博物館研究報告書 181、pp.165-204.